



近森病院救命救急センター指定5年を振り返って

近森病院救命救急センター長 根岸 正敏

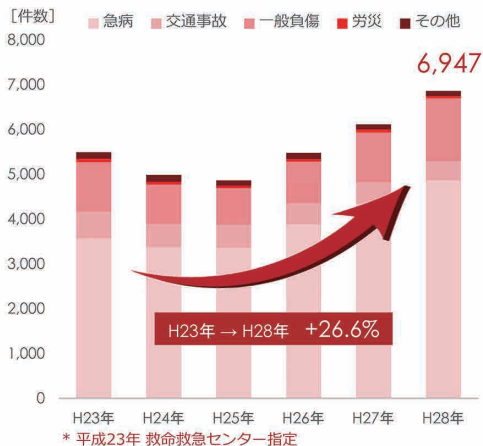
【いつでも、誰でも、どんな疾患でも】

近森病院は開設70年を迎えますが、一貫して「医療の原点は救急である」という方針を掲げ邁進してまいりました。平成14年には『いつでも、誰でも、どんな疾患でも』という北米型救急医療の理念を取り入れたER救急センターを立ち上げ、高知市内はもとより県下全域から救急患者さんを受け入れてきました。その後、社会的公益性が認められて社会医療法人に認定され、平成23年には救急・災害医療への貢献が評価され、高知県で3番目の救命救急センターに指定されました。

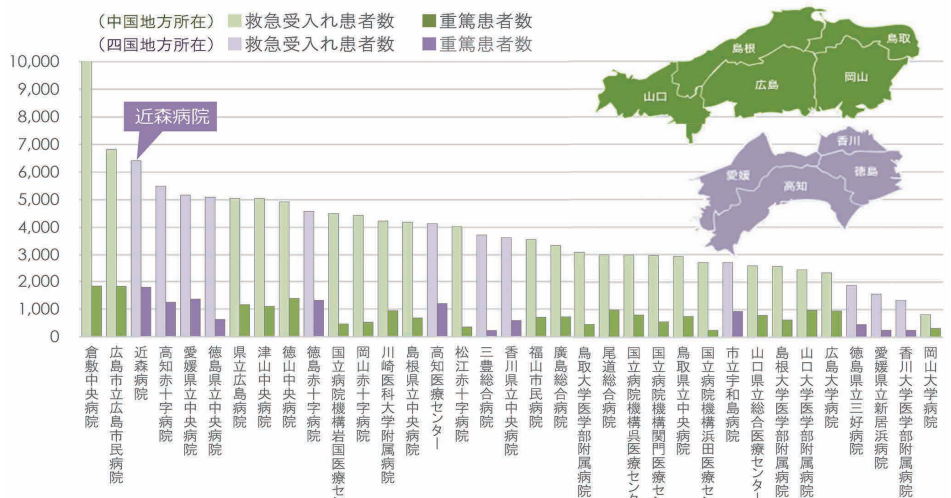
【年間7,000台超を見込む受入れ数】

その後も患者さん主体の医療を実践、また地域医療機関、消防関係機関との連携を更に強め、受け入れ体制の強化をはかり、ハード面では平成25年8月に新しい救急外来（ER）と救

近森病院への 救急搬入件数



年間受入救急車搬送人員/重篤患者数 中四国・救命救急センター（平成27年度実績）



命救急病棟、そして待望のヘリポートが完成しました。加えて、集中治療室・脳卒中治療室の充実も相まって、救急患者さんは年々増加の一途であり、平成28年度の救急車受け入れ件数は7,000台（ドクターヘリ受け入れは100件を超え）を超える勢いで、県内で最も多くの救急患者さんの受け入れを行っています。医療の質に関しては、救急医療への取り組みや現状について、日本医療評価機能に第三者の立場からの評価を受け、西日本で3番目の救急医療付加の認定もいただくことができました。

【救急医療で今まさに必要なもの】

少子高齢化社会を迎え変遷する日本の救急医療で今まさに必要なものは何でしょうか。心の通った質の高い医療ではないでしょうか。患者さんの疾患

だけを治すのではなく、社会的背景を含め、人として真摯に受けとめての最良の医療、全国レベルの良質な医療を提供することが重要であります。さらには迫りくる南海トラフ大地震や津波に対する災害医療体制の充実も重要です。そのためにも、この5年間をしっかりと振り返り、今後さらに高知県の皆様に『必要とされる救急医療』を目指し、新たな気持ちで取り組んでいきたいと思えます。ねぎし まさとし



救命救急センターにおける緊急開頭手術の様子



何ができるかではなく
何が必要かを考える
patient-firstの姿勢を
忘れず

近森病院
理事・内科部長 浜重 直久

近森病院に着任して29年目、副院長になって20年目で、無事定年を迎えることができました。若い時から血の気が多く、よく定年までもったものだと言われますが、近森正幸院長の包容力とスタッフの皆さんのご協力のおかげと心より感謝しています。

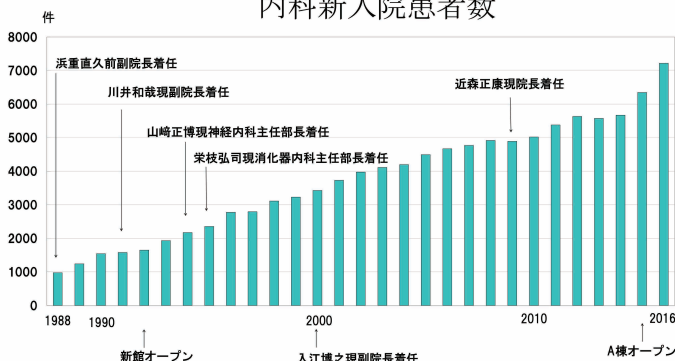
当初は、内科医7人、年間新入院患者1,000人以下で、外科系病院のおまけの内科といった感じでした。しかし、心カテチーム、内視鏡チームを整備し診断・治療能力をあげるとともに、外来ではかかりつけの先生と連携し一生つきあつもりできちんとフォローし、いざという時はいつでも引き受けるということが続けていけば、患者さんはどんどん増えるだろうと思っていました。おかげ様で、山崎正博、川井和哉、栄枝弘司各部長をはじめたくさんの先生方が集まってくれ、現在では内科医50人で年間新入院患者7,000人以上を診療するようになりました(図)。また、2000年の心臓血管外科開設(入江博之部長)やICUの整備などもあって、ほとんどの診療が院内で完結できるようになり、スタッフの能力アップと自信につながったように思います。

経営や管理面の仕事はほとんど近森院長と北村副院長におまかせし、私の仕事は、医師の確保や教育と、診療のレベルアップに専念させていただきました。それでも右肩あがりの状態が続き、一昨年には5カ年計画で病院のリニューアルも完成し、本当にいい時代を過ごさせていただいたと感謝しています。

これから医療をとりまく環境はますますきびしくなり、新しい院長、副院長にはより緻密な経営戦略が求められています。何ができるか(can)ではなく何が必要か(should)を考えるpatient-firstの姿勢を忘れず、これまで以上に患者さんや地域の先生方に信頼される近森病院であってほしいと願っています。私も、外来や回診、症例検討などを通じてもう少しお手伝いできればと思っています。

はましげ なおひさ

内科新入院患者数



一瞬を大切に生き、
コミュニケーションを
図りながら

近森病院
理事・外科部長 北村 龍彦



副院長退任にあたって、今日までを振り返ってみる。子どもの頃に医師を志し、40年前に医学部を卒業し外科・小児外科を学び、1986年に近森リハビリテーション病院の初代院長である石川誠先生とともに近森病院に赴任した。近森病院では近森正幸院長に成人の救急外科を教わりながらトップで若い外科医と外科診療を行い、当直やオンコールも院長と交替性となり院長の負担軽減ができたこと、とても喜ばれたのを覚えている。

学位や学会の指導医・専門医など個人としての各種資格も近森病院で取得し、病院としてレベルアップに必要な専門医修練施設や教育施設及び管理型臨床研修病院(現基幹型)などの認定も可能な限り取得した。一方近森病院内の組織や体制への関わりとして、合同運営会議の設置や付き添い看護から基準看護へ体制変換、病院情報システム構築や感染管理、災害対策、診療録管理体制の整備、職員が安心して働ける職場作りと福利厚生のために産業医の資格を取得し健康診断や健康維持増進活動の整備などにも関わらせていただき、病院やスタッフのために少しはお役に立てたかと思う。20年前に副院長職に就き、10年前には松田病院を法人が譲り受け、老人病院から先進的な近森会グループの一員となるべく院長として赴任し、松田病院から整形外科専門のリハビリ施設である近森オルソリハビリテーション病院の誕生に際して整形外科の医師やスタッフの協力で順調にスタートが切れ、初代院長としての役割を果たせたのもつい先日のようなものである。

このように振り返ると大きな出来事が10年単位で訪れていた。大過なく業務に専念できたことは近森院長や浜重副院長、川添管理部長と今までお世話になった仲間のおかげと感謝している。

さて、これからのことを考えると、国の施策や医療制度、診療報酬体系、医療情報システムなどが加速度的な進歩と変化を遂げ、昨日までの常識が明日には常識でなくなる可能性もある。新しい院長・副院長の方針のもと、医師やすべてのスタッフにとり、溢れる情報を取捨選択し、知識と技術と感性を磨く必要があると考える。しかし、われわれ医療者の本質は一瞬一瞬を大切に生き、仲間とコミュニケーションを図りながら、すべての人に「あなたのために」の気持ちを持ち「真善美」を診療現場で尽くしていくことが肝要と考えている。

副院長の退任とともに定年を迎え、今までの業務を後輩に移行していきながら、自分に与えられた使命をもう少し果たしていきたいと考えている。

きたむら たつひこ

看護部 ● 業務改善活動報告会

2016年12月23日

— 近森会グループ業務代表者会 —

働きやすい職場環境作りに

近森オルソリハビリテーション病院

4階病棟看護師主任 江藤 末子



平成28年12月23日（金）に近森会グループ恒例の業務改善活動報告会を開催しました。

参加部署は29部署、参加人数は約190名でした。各部署が日常業務の問題点を取り上げ、QC（QualityControl・品質管理）の手法にもとづいて問題点を明確化し、努力、工夫して取り組んだ成果の報告は、とても聞きごたえのある内容でした。

今回は近森正康院長にも参加してい

ただきました。質問や意見をいただいたことで、視野を広げ、問題や課題がより明確になったのではないかと思います。

今後はこの活動に学びながら、グループ全体で業務改善について考え、取り組むことのできる組織風土、働きやすい職場環境作りに取り組んでいきたいと思ひます。 えとう すえこ



ちかもりよさこい応援！



募金の樽を設置しました。

2017年もちかもりの踊りを見たい！ちかもりで踊りたいあなたに朗報！

2016年本祭をもって活動停止予定だったチームちかもりですが、2017年も継続できるよう準備中です。つきましては、管理棟1階によさこい募金のために樽を設置しています。職員の皆様、どうぞご支援お願い致します。

2月の歳時記

ストレッチア (Strelitiza)

近森リハビリテーション病院
3階病棟東 歯科衛生士

楠瀬 美佐

「ギンヨウアカシア」や「フサアカシア」などのアカシア属の花木をミモザと総称しますが、原産地はオーストラリア

です。鮮やかなイエローのポンポン状の花冠をつける姿が可憐で愛らしく、花言葉は『優雅』『友情』『秘密の恋』ともいわれ、フランスのミモザ祭りでは、ミモザの花束を投げあい、春の訪れを祝います。春を感じながら、切花やリースにしてミモザの花を楽しんでみませんか。

くすのせ みさ



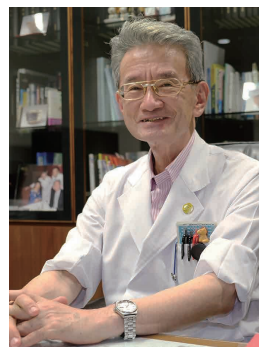
絵・近森病院
附属看護学校
事務局 南幸子

これからは「理事長のひとりごと」

社会医療法人近森会理事長 近森 正幸

昭和61年（1986）7月に「ひろっぱ」創刊以来およそ30年、ほとんど休むことなく書き続けてきました私の「今月の言葉」欄を、近森病院院長を退くにあたって終了することとしました。長い間で愛読いただいた読者に厚くお礼申し上げます。

近森会グループのホームページに「理事長のひとりごと」のスペースをいただきました。これからは近森病院院長という重責から解放された気持ちもあり、頭の体操もかねて、そちらの方に勝手気ままな文字通り「独り言」を綴っていきたくと思っています。左のQRコードから直接入っていただけますので、興味のある方はいちど覗いてみてください。



「ひろっぱ」発行者が交代します。



◀「ひろっぱ」創刊から発行者として「ひろっぱ」の陣頭指揮をとってきた社会医療法人近森会理事長・近森正幸（前列右から2人目）が近森病院院長退任を機に近森病院新院長・近森正康（前列中央）と発行者を交代しました。



訪問看護ステーションちかもり
所長 看護師長 中西 洋子

「自宅で暮らす」を支援します

「訪問看護ステーションちかもり」の歴史は長く、昭和62年4月にリハビリテーション科継続医療室から在宅訪問が開始され、平成4年7月に「老人訪問看護ステーションちかもり」が設立されました。平成6年には、健康保険法の一部改正により、身体に障害がある患者さんへの訪問が可能になり、平成12年4月には介護保険法のもと、居宅サービス事業所として登録されました。

現在看護師5名、理学療法士2名、作業療法士1名、言語聴覚士2名（常勤兼務登録）、事務員1名の人員で、利用者は月90～100名となっています。24時間連絡対応体制を整えてい

ます。

主な疾患は神経難病、頸髄損傷、呼吸器疾患、脳血管疾患、悪性腫瘍、医療依存度の高い持続点滴、人工呼吸器、気管カニューレ、留置カテーテルなどを使用していて、自宅で療養したいと希望される方が対象となります。

訪問看護の目的は、地域リハビリテーションの理念に基づいて、病気や障害があっても住み慣れた地域、住み慣れた家で家族や友人、地域の人とその人らしく過ごすことが出来るように、安心、安全、安楽を提供することです。



病院の地域医療連携センターや病棟や外来と連携することで、できる限りスムーズに在宅療養生活に移行できるように、療養生活が継続できるように支援します。

なかにし ようこ

ザ・RINSHO

管理部 7



研修に専念できる 環境づくりをサポート

総務部 部長 谷 知明

総務部には、総務課、経理課、秘書課が所属していますが、そのなかの総務課臨床研修担当の業務をご紹介します。

臨床研修担当は、主に医学生、初期臨床研修、および新専門医制度の事務局業務を担当しています。医学生に関しては、県内外の7大学から年間延べ約100名の学外臨床実習の受入れを行っています。

初期臨床研修に関しては、研修医の採用から研修修了までの全般に関わっています。また、募集活動では、県内外の合同説明会への出展（年間約15回）を行い、さまざまな見学の受入れ（年間約50名）の希望にも、柔軟に対応しています。お蔭さまで、現在7年

連続フルマッチ中です。

新専門医制度に関しては、2017年度より開始される整形外科と救急科のプログラム制、2018年度より開始予定の内科・総合診療科等のプログラム作成支援や申請の事務補助を進めています。

その他、高知医療再生機構が行っている、医師の資格取得等の補助事業に関する申請や報告の事務補助を行っています。

医学生、研修医や専攻医、そして指導医の先生方が、見学・実習や研修に専念できるより良い環境を提供できるよう、これからも取り組んでいきたいと思っております。

たに ともあき

近森看護学校通信 14

看護学校の広報活動



本校では、開校前から高等学校への訪問や資料の送付、新聞広告への掲載やホームページの立ち上げ、近森会グループの各院へのポスター掲示など、教職員一同で学校の広報活動を行ってきました。なかでもホームページは定期的に更新を行っており、資料請求や行事の問い合わせなどリアルタイムに反応が見られる一番強い広報ツールだと実感しています。しかし最大の広報活動は、看護師となった学生が社会の一員として、病院施設や地域に貢献することだと考えます。

今後も地域医療に貢献し、看護学校の名を広めていける学生が育つよう教職員一同頑張りたいと思っております。

(南幸子)

奨励賞を受賞

学会奨励賞を受賞

一つひとつの症例から
学びを得て



近森病院消化器内科
井上 薪

愛媛県で開催の第117回日本消化器内視鏡学会四国支部会に「Microscopic colitis」に関する症例報告をして学会奨励賞をいただき、5月の総会に招待を受けました。Microscopic colitisは慢性下痢を特徴とし、大腸の組織標本を顕微鏡で観察して初めて診断され、ここ近年で認知度が高まってきた疾患です。世の中には未だ認知されていない疾患が多く存在すると思います。医学は日々進歩しますが、一つひとつの症例から学んで、常に新しい知識を修得したいと思います。いのうえ しん

学会専修医奨励賞を受賞

これを励みに
また日々の診療も



近森病院消化器内科
田村 恵理

このたびは、消化器病学会専修医奨励賞をいただき、4月の総会にも招待を受け、たいへん嬉しく思っています。このような賞をいただくことができたのも、熱心に指導して下さった指導医の先生方のおかげです。

後期研修医1年目でまだまだ未熟な点も多々ありますが、これを励みにまた日々の診療も一生懸命がんばってきたいと思います。

これからもご指導よろしくお願いたします。

たむら えり

「乞!熱烈応援」

趣味を忘れるほど



近森病院 脳神経外科
科長 野中 大伸

2015年10月、近森病院にお世話になることになった際、釣りが趣味だと書きましたが、この1年間で趣味だったということは忘れてしまいました。

先生方の、「すべては患者さんのために」という熱い思いのもと、チーム医療の一員として、何ができるかを考えながら診療をしていきたいと思えます。

健康のために室内用自転車を買いました。新しい趣味にします。

のなか もとのぶ

リレー エッセイ

自転車通勤が唯一の運動

施設管理センター
藤本 直路



出るかもしれませんが、街中では信号によるストップ&ゴーも多いので、ちょうど良い軽さのギアで漕ぎ出し軽くしてそのまま回転数高めでクルクル回して走った方が意外と加速も良くペースも安定して結果的には速いというのかもしれませんが。

春野から片道13km弱走っていますが、トップスピードの出る重めのギアで条件がいい時に結構頑張って50分ぐらいです。普通に漕いで55~60分、軽めのギアでクルクル回して同じぐらいか、ちょっとのんびり



でも65分ぐらいです。

この15分程度は意外と差がないと感じました。最大15分の差なので、平均を取ると5~10分ぐらいの感じなのです。重いギアだと負荷がかかって身体に疲れが残るので運動した感じがありますが、実際は軽めのギアで心拍数少し高くなるような乗りの方が運動としては効果が高いと思います。ふじもと なおじ

私の趣味

料理が好き



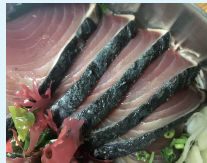
近森病院 救命救急センター (ER)
救急救命士 内田 優

僕の趣味は食べることです。食べると言っても誰かと一緒に食べることが好きです。食事を通して自分の知らない相手の一面を知ることができる。またより仲良くなり絆が深まる。そして結果的に仕事やプライベートの質を向上させることにも繋がるのが、食事の魅力だと僕は思います。

実際に福岡から就職で高知に来て、知っている人はいませんでした。歓迎会、同期同士の飲み会などを通して信頼できる仲間にも巡り会えました。また料理をすることも好きで一人暮らしをしていることもあり、自分で料理をすることが多くなりま

した。晩ご飯はインターネットを通してメニューを決めることもあれば、買い物をする際に食材を見ながら決めることも好きです。自分で料理をするとどうしても好きなものに偏りがちなので、野菜も取り入れるように心掛けています。今年は小さい頃から好きな「漬物」にチャレンジしたいと思っています。漬物は万能に食卓を彩ることができるので今年中にはものにしたいです。

今後も料理を続けていき、将来家族ができたときに少しでも奥さんの力になれるように腕を磨いていこうと思います。 うちだ まさる



ワイン講座 ● 49

ぶどう品種を知り、個性を探る
白ぶどう その27

スペイン篇 モナストレル

近年、世界的に注目されるモダンなスタイルのワインを次々と誕生させているぶどう品種のひとつです。モナストレルの原産は、スペイン南部バレンシア州が原産といわれ、とくにスペイン南東部で多く栽培されています。

南フランスのラングドック・ルーションやプロヴァンス地方へも栽培が広がり、フランスでは、ムールヴェードルと呼ばれ、著名なワインではバンドールやフォージュールなどが、この品種を主として造られています。干ばつに強く、暑いところを好み、小粒で

シルバー・ラベル/ファン・ヒル/スペイン、スペイン、フミーリャ地方 ● 誰もが満足するようなリッチな味わいを驚くほどリーズナブルな価格で世に送り出す生産者。樹齢40年以上の古樹のぶどうを使用。樽由来の甘やかな香り、熟した果実感があり滑らかな舌触り。果実、アルコール感、オークの風味がバランスよく調和し、長い余韻を感じることができます。

皮が厚く、果実味豊かで高アルコールのポリフェノールな味わいになる傾向があります。

スペイン、フミーリャのモナストレルVS南仏のモナストレル(ムールヴェードル)がどんなふうに、風味やスタイルが違うのか、飲み比べてみてもこの品種を知るうえで楽しいと思います。

鬼田知明 (有限会社鬼田酒店代表)



ハッスル研修医
全力を尽くして



初期研修医 橋田 侑樹

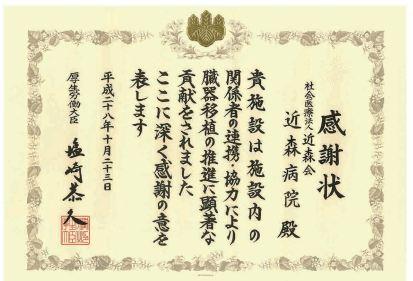
入職して9カ月経つというのが信じられませんが、光陰矢のごとしはこういうことなのでしょう。右も左もわからないまま始まった4月がつい先程のように思い出されます。当院の素晴らしい指導医の先生方、コメディカルの方々に助けていただいて少しずつ成長を感じており、恵まれた環境にいることを実感する毎日です。

walk in 外来、内科での症例を含めて数多くの common disease を診ることができており、将来何科の医師になるとしても必要な知識を得られていると感じております。一方で医者の不養生という言葉もありますが、自らの健康管理にも気をつけていかなければいけないと思い、大学時代から続けているゴルフの練習を再開しました。(暴食を止めろという声が聞こえてきそうですが)

「明日死ぬと生きて生きろ、永遠に生きて生きて学べ」とはガンジーの言葉ですが、体調管理をしつつ勉強を怠らずに目の前の患者さんにしっかり向き合える医師になれるよう全力を尽くします。今後ともよろしくお祈りします。 はしだ ゆうき

近森病院

昨年10月に、近森病院が「臓器移植の推進に顕著な貢献」をしたとして、厚生労働大臣から感謝状をいただきました。



出張報告

2016年11月10、11日



香港での技術指導

近森病院循環器内科
部長 山本 哲史

2016年11月10、11日に香港で行われました、Best Practice Exchange Programに参加してきました。目的は、冠動脈慢性完全閉塞（CTO）のカテーテル治療の技術指導で、香港の2カ所の病院（Princess Margaret Hospital, Queen Elizabeth Hospital）に、日本から私を含め3人の interventional cardiologist で訪問しました。

CTO治療は「匠の技」色の強いものでしたが、倉敷中央病院の故光藤和明先生を初めとする日本の匠たちの力により、より理論に裏付けられた確立した技術となりつつあります。これら理論を、技術的なtipsとともに、no touch proctoring という形で、実際の患者さんの治療を行って、現場で香港の若い先生方にお伝えしてきました。両病院ともに、用意された症例は全て成功裏に終えることができました。

一方、CTO治療を行っている傍のカテ室では、今後日本でも承認されるであろう僧帽弁クリップや左心耳閉鎖機器を用いた低侵襲心臓手術が積極的に行われており、驚かされました。

さらに驚いたのは、香港の海鮮レストランでは周囲の魚市場で魚貝類を選び、それらを料理してもらうのですが、



市場の水槽では我々釣師の憧れ「クエ」が超巨大物を含め大小入り乱れ泳ぎ回っていたことでした。そして、やはりさすがはクエ、得も言われぬ美味しさでした。

やまもと さとし

出張報告

2016年10月3～30日



有意義な研修

初期研修医 橋本 大輔

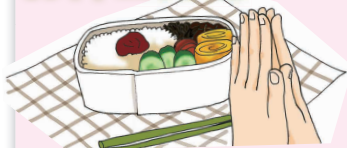
聖マリア病院救急科で1ヶ月間研修しました。久留米市の研修医とともに、救急医療の第一線で学んできました。聖マリア病院は、近森病院と同様に救急車の搬入件数の多いところで、対応するスタッフの動きもテキパキとスピード感がありました。実際に働いてみると勝手が違うところが沢山ありました。求められて初めて気づくことが日常茶飯事で、学びは多かったです。

救急隊からの電話対応は、これまでは上級医や看護師さんが行っているのを見ていることばかりでしたが、ここでは研修医が対応する習慣があつて実践していく中で自然にできるようになりました。患者さんが搬送されると研修医みんなで協力してみている雰囲気がとても良かったです。カルテシステムやオーダーなどは慣れるまで戸惑うこともありましたが、優しく教えて下さる救急科の先生方や、共に学ぶ同期や後輩などの助けもあり日々楽しく勉強させて頂きました。上級医の先生方には適宜フィードバックも頂きながら質の高い研修を受けさせてもらいました。

研修も2年目になり、いづらか落ち着いて対応できるようになってきていますが、周囲がフォローしてくれていることに慣れることで見えなくなっているものもあるのかもしれませんが、研修期間の内に同じ科で別の施設を経験することも学びが多いと感じました。また、高知を思い切って飛び出してみると新しい仲間もできました。久留米で美味しいご飯を食べながら、それぞれの話を聞くこともありモチベーションをもらいました。とても有意義な研修期間でした。はしもと だいすけ



お弁当拝見 49



手拭いが主役のお弁当！

近森病院薬剤部 薬剤師 川村 知子



私の場合、この手拭いを使いたくしてお弁当を持ってきていると言っても過言ではありません。

手拭いにはそれぞれイメージと意味合いがあつて、毎朝その日のお弁当の中身と気分を選びます。例えばジャガイモがあればごろごろとしたデザインの手拭いを、卵焼きの日は黄色

でふわふわしたイメージの手拭いを。朝は選ぶ作業が楽しくて、お昼にはほっこりした気持ちにもなれます。毎日とはいきませんが、おかげでお弁当作りも続いています。

かわむら ともこ



● 人の動き ● 敬称略 ●

2017年度 看護職員 採用試験

近森会グループ

私たちと一緒に看護しませんか？

2/24 (金)

CHIKAMORI HEALTH CARE GROUP

履歴書を試験日の1週間前までに近森病院管理棟看護部長室まで、郵送またはご持参ください。
 詳細は近森会グループホームページをご覧ください。
 【問合せ】看護部長室秘書まで
 TEL. 088-822-5231

● おめでとう ●

『医療現場の応対用語』
にとりあげられました。



当グループの職員研修に長年携わって頂いている江藤かをる先生の著作に、PS サポーターの活動をとりあげて頂きました。
 購入をご希望の職員は、総務課岡崎までご連絡ください。

2016年12月の診療数 システム管理室

近森会グループ	
外来患者数	19,449 人
新入院患者数	1,024 人
退院患者数	1,104 人
近森病院（急性期）	
平均在院日数	14.24 日
地域医療支援病院紹介率	68.15 %
地域医療支援病院逆紹介率	173.81 %
救急車搬入件数	629 件
うち入院件数	325 件
手術件数	468 件
うち手術室実施	326 件
うち全身麻酔件数	176 件

● 2016年12月 県外出張件数 ●
 件数 38 件 延べ人数 67 人

● 編集室通信 ●

新年を迎え、早1ヶ月が過ぎました。「1月行く、2月逃げる、3月去る」と言いますが、今年は例年よりゆったり時間が流れているように感じています。通勤時に香る臘梅に季節を感じ、春の訪れを待ち遠しく思い、そろそろ大好きな沈丁花が香り始めるかなとワクワクしています。忙しい日々も心豊かに過ごしたいと思います。（陽）

図書室便り 2016年12月受入分

- 救急での異物除去この一冊で全身攻略！／千代孝夫（編）
- 医療安全管理対策の基礎知識 医科・歯科共用（2017年1月改定版）／全国保険医団体連合会（編）
- 医療六法平成29年版／中央法規出版（監）
- 看護に生かす腹臥位療法うつぶせ寝で「身体と心」を取り戻す／川嶋みどり（編著）
- 《別冊・増刊号》
- 月刊 Medical Technology 別冊超音波エキスパート17 腎・泌尿器領域の超音波検査／千葉裕（他編）

作業療法を続けることが生きること

日本の作業療法士、第一号

日本で初めての作業療法士国家試験が実施されたのは51年前、1966（S41）年2月のことだった。合格者に同年、厚生省（当時）から出された免許番号の第一号「第10001号」、つまり日本の作業療法士の第一号の免許を持つのが松本妙子さんである。ただし、職業人としてのスタートは栄養士だった。

「患者さんと過ごす」栄養士の研修

明治生まれの母親が果たせなかった「上の学校に行く」ことを、「自分の当然の務め」と思っていた妙子さんは、県立高知女子大学生活科学科の一期生として進学、栄養士と中学高校の家庭科の教諭の資格も取った。当時、親元から通えたのは栄養士の資格を活かす方だったため、高知赤十字病院に就職。

では栄養士が、なぜ作業療法士の道へ進むことになったのか。身内を治したいと、栄養科の上司が立ち上げた「清生園」（病院）に誘われた松本さんは、早々に参加した栄養士の研修会で、日本最古の精神科の歴史を持つ都立松沢病院を見学。栄養士が、自宅復帰した患者自身の可能な調理方法を教えていた。

初めて聴く「リハビリテーション」

「遠くまで研修に行かせてもらったのだから習ったことを活かしたい」と、現場に戻り、「お好み献立」AかBかを患者さんに選んでもらったり、近所の川原で「野外食」を試みたり。精神を病む患者さんを活動的な動きに巻き込みたいと試行錯誤し、それにやり甲斐も見つけていた。松沢病院で初めて耳にした「リハビリテーション」という単語が気になり始め、基本的なことをもっと知りたいとも思いました。

日本初の国立リハ学院に入学

求めれば情報は飛び込んでくるものでちょうどそんな頃、日本初の国立療養所東京病院附属リハビリテーショ

ン学院（リハ学院）が1963年（S38）年5月に開校することを新聞で知る。「患者さんと動く」ために入学を決意する栄養士の志を、職場には後押ししてもらい、母親は一言、「行きたきゃ行きなさい！」。

当時34歳。見合いの話もあったが、「ピンと来なかったし、研修会でカジってきたことをもっと深く知る方にずっと興味があった」。全国から集まった同級生は20人、その最年長だった。

最初の頃は授業も試験も全て英語。「作業療法」理論もリハビリテーション理論も、教えるのは日本語の話せない米国籍を中心の外国人作業療法士の先生方だった。日本の作業療法士教育はまさにこんな風に始まったのだった。

日本作業療法士協会設立を呼びかける

3年間学び、資格を得たリハ学院第一期生の松本さんと、米国で資格を取得された学院講師陣で、卒業直後の5月、「日本作業療法士協会」設立の呼びかけ文を作成。手書きの起草文には、当時のリハビリテーションの現状について、「最近ようやくその必要性が認識され、これに伴ない作業療法が注目されはじめ、厚生省も本腰を入れ始めた程度であり、従って諸外国との開きは、まだ格段の差があり」云々とまず説く。「相互に連絡提携して内外の諸問題に対処できる組織を持つ必要があるのではないのでしょうか。作業療法士として我々の社会的な身分を確立しその業務にプロフェッショナルな権威と内容を与え、（後略）。将来を展望し、作業療法士の進む道を敷いた一人が松本さんだった。

日本の作業療法士の歩みは、『日本作業療法士協会五十年史』（一般社団法人日本作業療法士協会2016.9.25発行）にまとめられていて、松本妙子作業療法士の功績も詳述されている。

近森会で作業療法30年

「清生園」（病院）定年退職後、近森病院精神科作業療法士の結婚退職を

▼好きな黒が基調だが首周りは少々華やかに、通勤スタイル



▶作業療法のプログラムのひとつ陶芸教室でのひとこま。まるで自身が創っているつもりで、つい真剣になってしまう



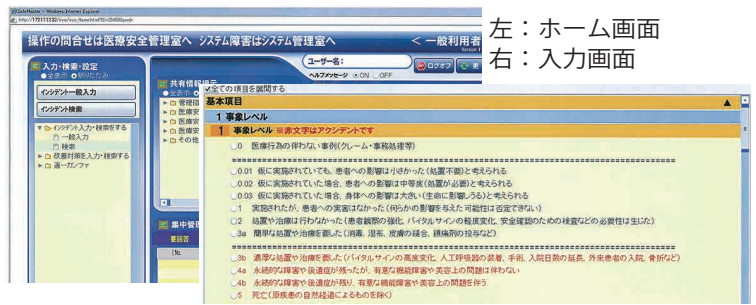
◀「日本作業療法士協会」設立に当たっては、設立趣意書を書いた五人のひとりで、以来半世紀の永きに亘り、「同会の発展に多大の貢献」をされたとして2016年9月25日の設立50周年記念式典では中村春基会長から感謝状が贈られた。これは、その壇上での記念撮影

機に、後任として呼ばれたのが1987（S62）年3月。週2回の非常勤としての松本さんと、当時新卒の山内室長とで作業療法を継続していくことから始まった。徐々にスタッフの充足も図られていったことで、多くの取り組みが出来るようになってきた。ふり返ってみると、「ここで、こうして皆さんと作業療法をしていることが自分の作業療法にもなっていると思う。仕事自体、生きること自体が作業。各自に相応しい作業療法がある筈です。

にこやかに穏やかに、淡々と、こんな風に締めくくられた。

医療安全活動報告

医療安全管理システム ～セーフマスター～を 導入して



左：ホーム画面
右：入力画面

2016年4月より、医療安全管理システム（セーフマスター）が導入されました。導入後、インシデント・アクシデント発生時は、報告者が所属長に口頭報告後、各部署の端末から事象の登録を行い、医療安全管理者・所属長・セーフティー委員は登録と同時に事象を確認できるようになりました。

報告件数はシステム導入前は毎月200件前後でしたが、導入後は微細なインシデントやトラブルなどの報告も増え300件前後となっています。これまで紙ベースで格闘していたインシデントの分析がデータ化しやすくなり問題を把握しやすくなりました。医療現場で発生しうる事故へのリスク対策について考える機会、対応・対策に繋

がり、安全な医療環境作りへ前進しているといえます。

大切なのは問題が発生した後の対策を講じることですが、各部署では事象発生後の問題に対して積極的に検討し対策を講じてくださいました。院内ラウンドでは、職員の安全への配慮場面や工夫の発見があります。

医療安全管理部では、重要なインシデントやアクシデントと対策は、医療安全ニュースの発行により全職員へ通知するほか、システムや対応手順作成で改善できる問題は関係者の協力を得て改善することができました。

このように医療安全への対策が少しずつ前進しているのは、職員の取り組みの成果です。

今後もさらに、分析や個々のインシデントへの対策を実践し、職員みんなで協力し患者さんが安心して治療がで



き、職員が安心して働ける病院をめざし活動を続けていきたいと思えます。職員のみなさんのご協力をよろしくお願ひします。

(医療安全管理部)



講演会を開催しました

▲2017年1月6日には、静岡県精神保健福祉センター所長、松本晃明先生をお迎えし「高齢者における不眠対応の実践」についてお話しいただきました。

医療安全で、気になるトピックを、院内掲示板や病棟に配布するなど、職員に発信しています。

医療安全委員会賞 臨床工学部

6R 活かす現場に 事故はなし

看護部長賞 透析室

管理部長賞 内科医局

自腹切る 覚悟を持って 誤認なし

院長賞 ICU

リストバンド 飾りじゃないのよ 確認を

最優秀賞 内視鏡センター

はじまりは 恋も仕事も 君の名は?

医療安全川柳表彰式

二〇一六年十一月は医療安全推進月間として、職員に「患者誤認」をテーマに川柳を募集しました。応募総数は一三九(二八部署)より、入選三〇句が選ばれ職員投票により最優秀賞が決定しました。今年の一月十一日に表彰式が行なわれました。(部署の代表者の皆さんと記念撮影)